

【原 著】

保育内容「環境」の授業前において
保育者志望学生が抱く環境概念の特徴

西山 修

Characteristics of the Environmental Concept of the Students Who Aim to Work in
the Childcare Field before Taking Classes about Childcare Contents “Environment”

NISHIYAMA Osamu

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

保育内容「環境」の授業前において

保育者志望学生が抱く環境概念の特徴

西山 修※1

本論では、保育者志望学生が、保育内容「環境」の授業実施前に抱く環境概念の特徴と課題を明らかにすることを試みた。具体的には、保育者養成校において、保育内容「環境」の授業前の環境概念を捉えるため、文章完成法（SCT）を用いて記述データを収集した。記述データには主にテキストマイニングを援用した量的分析、及び質的分析を行った。また、現職保育者の環境概念との比較により、学生の特徴を検討した。その結果、「環境に関わる保育者の役割の捉え」「環境の統制可能性の捉え」「環境の基本的な位置付け」において、保育者志望学生と現職保育者との間に相違が示唆された。これらを踏まえて、今後の可能性と課題を若干述べた。

キーワード：保育内容「環境」、環境概念、保育者志望学生、現職保育者

※1 岡山大学大学院教育学研究科

I 問題

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(平成 27 年 12 月 21 日)において、今後の教員養成に関する具体的な方向性が示された(文部科学省中央教育審議会, 2015)。その後、教育職員免許法、及び同施行規則の改正に伴い、教員養成の新たな教育課程が実施されているのは周知の通りである。幼稚園教諭養成では、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が設けられ、「イ領域に関する専門的事項」と「ロ保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」の構成となっている。この内、「イ領域に関する専門的事項」は、5領域の教育内容に関する専門知識を備えた専門性の養成を目指し、「ロ保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」は、5領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の養成が目指されている(神長, 2017; 片山・伊藤・馬場, 2020)。

保育内容「環境」¹は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが目指される(文部科学省, 2017)。そのねらいとして、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」「身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」「身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊か

にする」が示され、内容として12項目が示されている。これらには、幼稚園教育要領第1章の第1に示された幼稚園教育の基本に沿った、身近な環境との関わりに関する保育内容が明示されている。

他方、幼児教育・保育における環境について、法令等には次のように記されている。例えば、学校教育法第22条（幼稚園の目的）には「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」と規定されている。平成29年告示の幼稚園教育要領においても、環境を通して行う教育は堅守され、第1章総則第1幼稚園教育の基本には、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」とされる（文部科学省、2017）。

無藤（2009）は、幼児教育・保育における環境には、2つの側面があると整理する。すなわち、保育内容「環境」というのは内容であり、何々について知っているとか、何々について学ぶというときの何々を指す。一方、環境を通しての保育というときの環境は教育方法であり、子どもに関わらせたいものに、身近な環境において子どもが自ら関わることで何か学ぶ、という方法的な理念を指す。保育内容「環境」と、環境を通しての保育というときの環境は繋がっているが異なる。また、幼児の場合には、それがかなり重なっているとも指摘する。保育内容「環境」の授業では保育者志望学生（以下、本文では学生と記す）に対して、これらを含め、幼児教育・保育の基本となる、環境に対する考え方を身に付けるよう指導する必要がある。

このように、極めて重要な「環境」という概念でありながら、保育者養成校に入学して間がない学生の中には、自然環境のみを環境と捉えたり、いわゆる環境問題を扱うと考えていたりする者も少なくない。そこで、西山・岡村・中川・片山（2017）では、保育者養成校における保育内容「環境」の授業において、環境概念の獲得に関する学生の学びの成果と課題を明らかにしようとした。具体的には、保育内容「環境」の授業において、学生の環境概念の変容を捉えるため、文章完成法（Sentence Completion Test；以下、SCT）を用いた記述データを収集し、テキストマイニングを援用した量的分析を行った。また、記述内容を質的に検討した。その結果、次のような点が明らかになった。第1に、KHCoder²を用いた量的な分析から、最終回授業では、「発達」「必要」「大切」「構成」「促す」「育てる」などの語と共起関係が強く、初回授業とは明らかに異なる語が示された。子どもの発達に必要なもの、大切なものを考え、環境を構成し、保育者自身も人的環境として積極的に関わっていかうとする姿勢が窺えた。「遊び」「主体的」といった基本的な幼児教育・保育の用語は挙がっていないものの、共起関係を総合的に考察すると、生活の中に子どもが学びの要素を見出したり、興味を持つ事柄に出会ったりといった、子どもが主体となって環境に関わる姿への視点が出現していることも示唆された。第2に、本格的な実習が未経験でありながら、総じて、学生なりに環境概念を獲得している様子

が窺えた。最終回授業時に保育者効力感の高い学生は、確かな環境概念を獲得している傾向があった。他方、全般的に、方法としての環境に意識が強く、内容としての環境にあまり意識が向いていない傾向があった。また、「身近な環境」という視点が弱いという特徴が示唆された。

この研究は、一授業者による実践によって、受講学生の環境概念がどのように変容したか探索的に検討したものであり、初回授業から最終回授業に至る変容を明示することには成功している。しかしながら、最終回授業での結果が必ずしも、現職保育者に求められる現場経験に基づく環境概念とは一致しない。そこで本論では、保育内容「環境」における、学生の環境概念の特徴を現職保育者の結果との比較から捉えることを目指す。これにより、実践力の養成に向けた、授業改善の手掛かりを得ることを目指す。

II 方法

1 調査対象及び時期

調査対象は、保育者養成校である A 大学の授業科目「幼児の環境」を受講する前の学生 42 名（男性 3 名、女性 39 名；平均年齢 18.95 歳、標準偏差.54）である。受講学生は全員、幼稚園教諭免許状の取得を目指している。欠損値などはなかったため、この全員を分析対象とした。調査時期は、2020 年 4 月から 6 月であった。

一方、現職保育者は、免許状更新講習に参加した 41 名（男性 3 名、女性 38 名；平均年齢 39.95 歳、標準偏差 10.22；保育経験平均年数 13.44 年、標準偏差 8.15）を対象とした。所属の内訳は、公立幼稚園 7 名、私立幼稚園 5 名、公立保育所 5 名、私立保育所 4 名、公立こども園 3 名、私立こども園 10 名、行政職、育休中などが 7 名であった。欠損値などはなかったため、この全員を分析対象とした。調査時期は、2020 年 8 月であった。

2 調査内容

環境概念の特徴等を検討するために、質問票への回答を求めた。質問票には次の項目を組み込み、後の考察の材料とした³。

環境概念の特徴を問う質問：SCT に準じたものを用いた。SCT は、曖昧かつ省略された未完成文章（刺激文）に対する自発的表現によって被検者の総合的な理解を図ろうとする心理検査であり、何を連想するかという点に無意識が関与する、投影法の 1 つとされる（小林，1999；佐野・槇田，1960）。ここでは自由記述の質問項目にありがちな、無回答や乏しい記述を避け、全ての調査対象から一定の広範かつ厚みのある回答を得るためこの手法を援用した。具体的な質問には、①保育における環境とは__（保育特有の環境概念の獲得について広く引き出す質問）、②環境に関わる力__（保育内容「環境」が目指すところの理解を問う質問）、③保育者は環境__（環境に関わる保育者の役割の認識を引き出す質問）、④環境は幼児__（環境が果たす幼児への影響等を広く引き出す質問）、⑤私は環境__（自分自身がどのような実践が可能か等、考えや思いを引き出す

質問)を設定した。

保育者効力感尺度：三木・桜井(1998)による10項目。回答は今回、違いを捉え易くするため、「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「全くそう思わない」の7段階評定(7～1点)で得点化している点は留意を要する。保育者効力感は、三木・桜井(1998)により、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことが出来るであろう保育的行為を取ることが出来る信念」と定義されている。効力感は、ある行動が自分にうまくできるかという予期の認知されたものであり(Bandura, 1977)、行動と直接的な関連がある。学生及び現職保育者の保育実践への自信や見通しを確認する。

保育への興味・関心、保育職の理解、及び保育職へのコミットメント：各2項目、計6項目(現職保育者には、保育への興味・関心を除く4項目)。具体的には順に、「保育という職業に関心がある」「保育という職業に興味がある」、「保育という職業をわたしは理解している」「よき保育者となるために何をすればいいか理解している」、及び「保育者としてやっていくために、いま自分で何かしている」「授業以外に、自分で保育に関する本や雑誌、番組をみる」とした。回答は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「全くあてはまらない」の7段階評定(7～1点)で得点化し、各2項目の合計点を分析に用いた。

その他、「幼児の発達に関わる全要因を100としたとき、環境が要因として占める割合」を0～100点で得点化を求めた。この質問は、SCTの回答への影響を考慮し、最後に求めている。対象には質問票の説明を行い、理解を確認した後、参加の同意を得た。また匿名性を守り、データの取り扱いに留意することを伝えた。回答は無記名とし、フェイスシートとして「性別」「年齢」、学生には「実習状況」、現職保育者には「保育経験年数」等の記入を求めた。

Ⅲ 結果と考察

1 学生及び現職保育者の特徴

幼児教育・保育に関わる実習状況を確認したところ、学生は附属幼稚園での観察・参加実習(1年次に1日)は経験しているが、実質的な実習となる保育実習、幼稚園主免実習等は全員経験していなかった。まず、これらの学生の特徴を記述するため、いくつかの変数から検討した。表1には、対象学生について、諸変数の平均値、標準偏差の結果を示した。また、現職保育者の各変数の値、分散分析の結果も比較のため併記した。

「保育職への興味・関心」は、学生のみに質問している。最大値の14点に近い高い値を示しており、天井とも言える。幼稚園教諭免許の取得を目指す学生のため、興味・関心は高かったと判断できる。これらの結果は西山ら(2017)とも一致する。

次に、「保育職の理解」「保育職へのコミットメント」について、それぞれ一

要因分散分析により検討した。その結果、「保育職の理解」では、学生は現職保育者に比べ有意に低かった ($F(1,81)=15.82, p<.001$)。「保育職へのコミットメント」は、有意ではなかった ($F(1,81)=1.64, n.s.$)。学生は、現職保育者に比べ、保育職への理解が不十分だと認識している。他方、保育職に向けて何らかの行動を起こし傾倒していると言える。

さらに、十分な信頼性・妥当性が確認されている三木・桜井(1998)の保育者効力感尺度を用い、一要因分散分析により検討した。結果は、有意ではなかった ($F(1,81)=.44, n.s.$)。人と関わる力を育むことに焦点を当てた西山(2006)よれば、学生の保育者効力感は、初任保育者に比べ高いことが確認されている。まだ本格的な実習経験がない学生は、実際の経験を踏まえた自信や見通しとは言えないながら、比較的高い保育者効力感を有していると言える。

「幼児の発達に及ぼす環境要因の占有」について同様に検討した結果、学生は現職保育者に比べ有意に低かった ($F(1,81)=27.38, p<.001$)。現職保育者は、自らの経験を踏まえ、幼児の発達に及ぼす環境要因が大きいことを経験的に捉えていると言える。また、学生では標準偏差が大きいことから、環境要因の捉え方にかなり幅があると考えられる。

表2には、学生及び現職保育者における諸変数間の相関係数を示した。注目すべきは、幼児の発達に及ぼす環境要因の占有において、学生と現職保育者では大きく結果が異なる点である。すなわち、現職保育者では、保育職へのコミ

表1 保育者志望学生及び現職保育者における諸変数の平均値、標準偏差及び分散分析の結果

	保育者志望学生	現職保育者	F 値
1. 保育職への興味・関心	12.91 (1.85)	—	—
2. 保育職の理解	8.55 (2.06)	10.07 (1.35)	15.82 ***
3. 保育職へのコミットメント	9.07 (2.62)	9.71 (1.83)	1.64 n.s.
4. 保育者効力感尺度 (三木・桜井)	44.38 (9.32)	45.59 (7.15)	.44 n.s.
5. 幼児の発達に及ぼす環境要因の占有	63.88 (19.63)	83.29 (13.54)	27.38 ***

() 内は標準偏差。保育者志望学生 $n=42$ 、現職保育者 $n=41$ 。

*** $p<.001$

表2 保育者志望学生及び現職保育者における諸変数間の相関係数

	1.	2.	3.	4.	5.
1. 保育職への興味・関心		.482**	.623**	.487**	-.344*
2. 保育職の理解	—		.603**	.596**	-.245
3. 保育職へのコミットメント	—	.444**		.517**	-.107
4. 保育者効力感尺度 (三木・桜井)	—	.538**	.496**		-.408**
5. 幼児の発達に及ぼす環境要因の占有	—	.171	.473**	.172	

右上は保育者志望学生 $n=42$ 、左下は現職保育者 $n=41$ 。

* $p<.05$ ** $p<.01$

ットメントとの間に有意な正の相関がある ($r=.473, p<.01$)。環境要因の占有が大きいと捉えている現職保育者は、保育職へのコミットメントが高い。これに対して学生では、保育職への興味・関心、保育者効力感との間に有意な負の相関がある (順に、 $r=-.344, p<.05$; $r=-.408, p<.01$)。また、学生では、他の関連変数との間には、いずれも比較的高い正の相関があるにもかかわらず、環境要因の占有のみ特異な傾向が窺える。これらについては、テキストマイニングによる分析結果と合わせて後述する。

2 KHCoder による環境概念の量的検討

保育内容「環境」に関わる、学生及び現職保育者の環境概念の特徴について全体的な傾向等を検討するため、全記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder³ (Ver. 3. beta.01) による分析を試みた。KHCoder は、ChaSen⁴ (松本, 2000) による形態素解析を行った上で、抽出された語の詳細な計量的分析を行う。取り出した語の統計分析、コーディング結果の統計分析、もとのテキストを確認するための検索や閲覧などの機能を持ち、柔軟な分析の環境を提供する (樋口, 2012)。質的なテキストデータを数値データと同じように扱うため、恣意的になりがちな作業を避け、膨大なテキストデータに潜む情報を要約し理解するには非常に有用である。

まず、学生及び現職保育者が記述した全文 (刺激文は除く) を ChaSen により分かち書きし、16,988 語を抽出した。抽出語の種類は 1,321 語であった。その中から 6,596 語を分析に用いた。分析に用いた品詞は、KHCoder の品詞体系に従った。また、一部の語を分けず、強制抽出の処理を行った (例えば「環境構成」「人間関係」等)。「思う」等の一般的な文末表現の語は分析から除外した。表 3 には、頻出語上位 60 語とその出現回数を示した。

次に、学生及び現職保育者による記述の全体的傾向を把握するため「共起ネットワーク」の検討を行った。共起ネットワークとは、「出現パターンの似通っ

表3 環境概念に関わる頻出語上位60語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	324	与える	47	安心	23	付ける	19
環境	313	学ぶ	46	家庭	23	取り巻く	18
幼児	153	様々	41	関心	23	適切	18
保育者	123	興味	39	心	23	感じる	17
成長	98	人	37	物的環境	23	変化	17
関わる	97	大きい	36	遊ぶ	23	理解	17
大切	91	遊び	32	経験	22	大人	16
力	79	構成	29	自ら	22	育む	15
整える	74	行う	29	自然	22	応じる	15
必要	69	自分	29	身	22	過ごす	15
影響	65	人的環境	29	活動	21	機会	15
重要	65	全て	29	関わり	21	求める	15
保育	65	育つ	28	友達	20	形成	15
発達	59	回り	26	子	19	工夫	15
生活	49	安全	25	場所	19	配慮	15

保育者志望学生と現職保育者の記述データを合わせてカウントしている ($N=83$)。

た語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだもの」である（樋口，2013）。図1には、群（学生，現職保育者）を見出しとして含めた共起ネットワークを示した（表示語数 59 語（入力語数 62 語），表示共起関係 90（入力共起関係 119），Jaccard 係数 .123 以上）。共起ネットワークでは，布置された位置よりも，線で結ばれているかどうかに関係がある。線が太いほど共起の関係は強い。また出現数の多い語ほど大きな円で示されている。作成した共起ネットワーク図では，先程の頻出語一覧をより視覚的に捉えることができ，学生，現職保育者と頻出語の関連も一目で理解することができる。表4には，学生，現職保育者毎の特徴語と Jaccard の類似性測度も示した。

図1では，学生と現職保育者に共通する語が中央付近に布置され，左右に群毎の特徴語が示されている。また共通する語から結ばれた線の太さは，語によって異なる。学生では，「重要」「保育者」「幼児」「環境」「子ども」「学ぶ」「人」「必要」「影響」「関わる」などの語との共起関係が強い。また，独自の語として「自然」「関わり」「行う」「適切」「家庭」「回り」などが示された。学生は，子どもの回りの環境の影響を意識し，適切な環境とは何かを知りたいという課題意識を持っている。また，家庭の環境を踏まえて保育を考えるという意識が

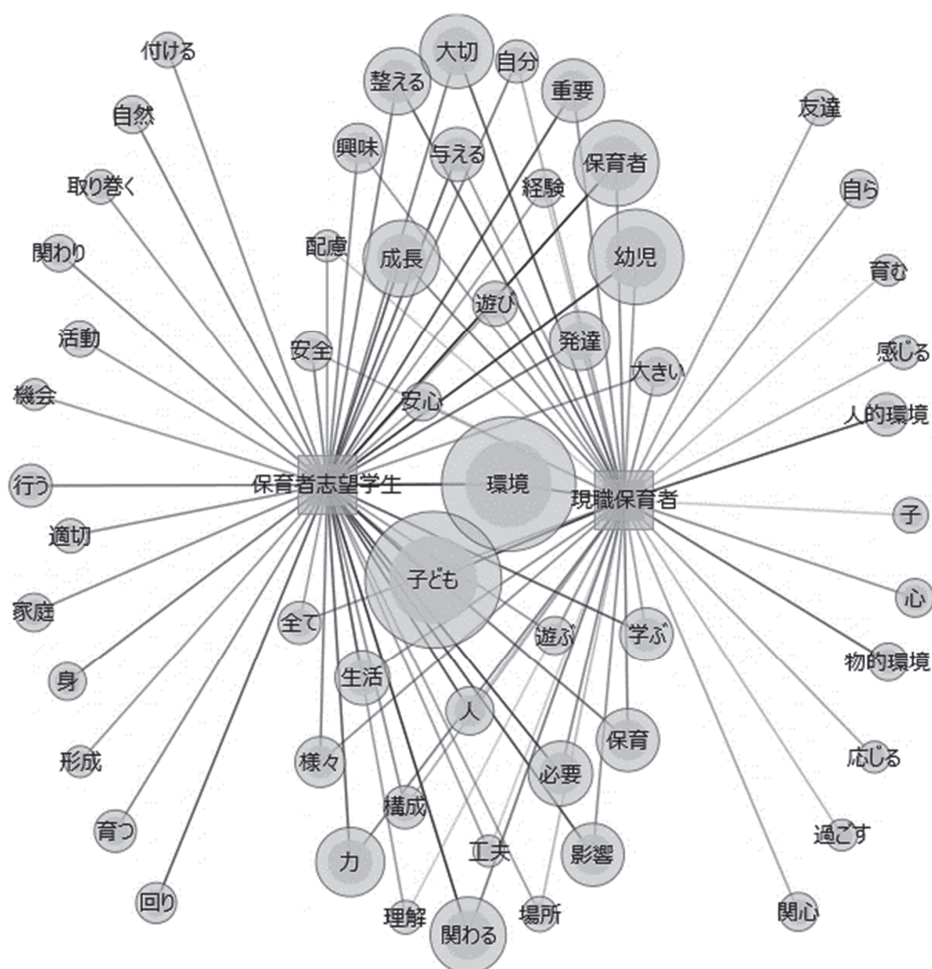


図1 保育者志望学生及び現職保育者における主要抽出語の共起ネットワーク

表4 群毎の特徴語とJaccardの類似性測度

保育者志望学生		現職保育者	
保育者	.548	子ども	.480
環境	.521	人的環境	.435
幼児	.500	大切	.383
関わる	.492	整える	.367
必要	.441	物的環境	.348
子ども	.436	保育	.288
影響	.421	大きい	.245
重要	.414	心	.229
人	.404	全て	.216
成長	.400	遊び	.216

表れている。動詞に注目すると「関わる」「学ぶ」などと共起関係が強く、これから学び、理解をしていこうとする意思が表れている。幼児教育・保育における環境の重要性は理解されているが、総じて、環境を整えることや、どのように環境が子どもと関わってくるのか、具体的な記述は少ない。

現職保育者では、「大切」「整える」

「子ども」「関わる」「人的環境」「物的環境」などの語と共起関係が強い。また、独自の語として「友達」「自ら」「育む」「応じる」「過ごす」「関心」などが示された。保育者は、人的環境と物的環境を意識しつつ、子どもの興味・関心を大切に、主体的に、日々の遊びや生活を積み重ねることが意識されている。また、年齢や発達に応じた環境を整え、心を育むことが意識されている。環境を考えると、子どもの主体性や発達に応じることが合わせて考慮されている点は、学生と明らかに異なる。

学生らは、表1に示されたように、高い保育職への興味・関心を持ち、実際に将来の保育職に向けた傾倒もある。保育者効力感も、数値としては現職保育者と変わらない水準にある。ただし、幼児の発達に及ぼす環境要因の占有に示されたように、現職保育者に比べ、幼児教育・保育における環境要因の比重は低かった。共起ネットワークの分析からは、適切な環境を構成していこうとする意思が窺える。他方、遊びや生活の中で子どもが興味・関心を持つ事柄に出会ったり、子どもが主体となって自ら環境に関わったりする姿への視点は乏しいと言える。以上の結果を含め、次では具体的な文脈でどのように記述されているか、コンコード分析等により確認しつつ質的に検討する。

3 学生及び現職保育者の環境概念の質的検討

ここでは、学生及び現職保育者の記述を具体的に取り上げ考察する。表5には、学生及び現職保育者における環境概念に関わる記述例を示した。既述のように、幼児の発達に及ぼす環境要因の占有において、学生では保育者効力感との間に有意な負の相関が見られた。そこで、表中には、環境要因の占有と保育者効力感の数値を参考に示している。

学生Aは、環境要因の占有が高く、保育者効力感が低い例である。環境を「幼児の生活する世界そのものだ」と表現し、保育の基本と意識している。子どもにとって保育者は環境の一部であるとの認識を持ち、子どもの興味に沿った保育の展開が重要とも述べている。他方、具体的な理解はできていないとの認識を持ち、実例などを深く学びたいと述べている。学生Bは、環境要因の占有が低く、保育者効力感が高い例である。遊具、園庭などの物的環境、自然環境に意識を持っており、「保育者は環境に積極的に関わり」保育をすることが重要と

表5 保育者志望学生及び現職保育者における環境概念に関わる記述例

●学生 A (環境要因の占有 100, 保育者効力感 37)

「保育における環境とは、遊具やおもちゃ、部屋や外などの回りの事物だけでなく、保育者などの人も含めた、幼児の生活する世界そのものだと思います。環境に関わる力を育てたいです。そのためにはその子が今興味をもっていることや好きなことに沿って展開していくことが大切だと思います。保育者は環境が「保育の基本」だと意識しなければならないと思います。時には修正もあると思うので柔軟に対応していくことが大事だと思います。環境は幼児の発達を促す重要な存在だと思います。その子の将来の生き方や考え方、人格の基礎になる大切なものだと思います。私は環境について、具体的にまでは理解できていないと感じるので、実例などをもとに深く学びたいです。」

●学生 B (環境要因の占有 30, 保育者効力感 67)

「保育における環境とは、子ども達が思いっきり遊べる遊具のある園庭、緑と触れ合うために植樹がされており、子ども達が安全に遊べるための教職員の目があることだと思う。環境に関わる力を身に付けるために、自然を観察しながらの散歩、それぞれの年齢にどのような自然に触れてもらうか考えてみる。保育者は環境に積極的にに関わり、しっかり理解した上で、それをどのように自分の保育に活かしていくことができるかを考える必要がある。環境は幼児が、丈夫な体と健やかな心を身に付けるためにある。私は環境とこれから積極的にに関わり、保育における環境とは何かをしっかりと学んでいきたいと思う。」

●現職保育者 A (環境要因の占有 100, 保育者効力感 59)

「保育における環境とは、人的環境、物的環境、自然環境である。その中でも保育者としての人的環境が最も大切であると思う。環境に関わる力は、保育者（家庭では保護者）の存在が大きく影響する。幼児が感動したとき、共感できるよう寄り添いながら、意味のある環境にしていくことが大切である。保育者は環境を考えると、実態把握を丁寧にすることが求められる。幼児の実態に合った環境に出会ったとき、幼児は心を動かし、友達と言葉を交わし、深く学ぼうとするようになる。環境は幼児にとって最も大切なものである。自ら主体的に学び、対話的に深い学びへと進めていく土台となる。私は環境としての自分の在り方について、振り返り、次に活かしていくことの大切さを実感してきた。また、自然環境の中での体験活動も、感性を育み、人としての安定した土台づくりには大切なものであると考えている。」

●現職保育者 B (環境要因の占有 100, 保育者効力感 51)

「保育における環境とは、子ども達の心や身体の成長を助けるヒントになるものです。整えすぎても、足りなさすぎてもいけない。保育者は環境を整え、今の子ども達、クラスに合っているかを考えながら準備しなければいけないと思います。環境は幼児と一緒につくっていくもの。保育者だけでなく、幼児の気付きや思いを取り入れながらつくっていくべきだと考えます。私は環境を基本と考え、日々保育をする上で気を付けたり、整えたりしてからが、一日の保育のスタートだと考えます。」

注)環境要因の占有は、幼児の発達に関わる全要因の中で環境が占める割合を0～100で回答を求めた数値である。保育者効力感は、三木・桜井(1998)の10項目を7段階評定し、得点化(合計)した。なお本表では、「保育における環境とは」「環境に関わる力」「保育者は環境」「環境は幼児」「私は環境」など刺激文を補足している。

捉えている。環境に関わることに意識がある一方で、保育者が環境を準備したり整えたりといった視点は記述からは見受けられない。

現職保育者 A, B は、環境要因の占有が高く、保育者効力感も高い例である。現職保育者 A は、環境に関わる力を育むための保育者の存在を重視している。環境構成においては、把握を丁寧に行い、子どもの実態に合った環境を整えることを大切に考えている。また、環境を通した様々な幼児の経験が、その後の人生の土台になると捉えている。現職保育者 B は、保育者が環境を整え過ぎず、子どもとともに環境を構成することを大切に考えている。両者とも、表現は異なるが、子ども主体の環境構成という点では一致している。

これらの例を含め、学生及び現職保育者の記述を総括すると、次の点を指摘できる。第1に、環境に関わる保育者の役割の捉えである。学生に多く見られた、「どのような環境が、どのように子どもに影響を与えるのか」「どのような環境が適切なのかを十分に理解したい」などの記述は、将来、保育者として適切な環境構成をするため、理解を深めようとする意欲の現れと言える。他方、環境について一定の機制や正解が存在するかのような記述とも言える。これに対して、現職保育者に見られた、「子ども達が自ら関わって遊ぶことができる場

を整える」「楽しい環境、やってみたい、面白いと感じる」「幼児自らが関わろうとする」などの記述は、あくまで子どもが主体であり、保育者の役割としての子どもに応じた環境構成が想定されている。

第2に、環境の統制可能性の捉えである。現職保育者の記述を通読すると、「意味のある環境にしていくことが大切」「環境を基本と考え（中略）気を付けたり、整えたり」などの表現のように、環境は保育者により統制可能性のあるものとして記述されている。同じ環境であっても保育者がどのように意味付けていくか、細やかに環境に気を配り日々整えていくか、によって子どもの発達に繋がる環境となると捉えられている。既述のように学生では、環境要因の占有と保育者効力感との間に有意な負の相関があった（表2）。幼児の発達に及ぼす環境要因を大きく捉えている学生ほど、具体的な実践の見通しが持てず、保育者効力感が低くなっている可能性も考えられる。学生Aの「柔軟に対応していく」の記述は、間違いではないながら、それを実践するには幅広い経験知が不可欠となる。具体的にイメージができれば、環境は、見通しを持ち統制可能な対象となり、学生の効力感も高まるものと推察される。

第3に、環境の基本的な位置付けである。学生の記述からは、「子どもに関わる全てのものごと」「子どもの成長・発達に大きく関わるもの」など、環境を子どもの育ちに重要な影響を与え、保育の基本と捉えていることが窺える。現職保育者らの記述からも、「環境は幼児にとって最も大切なもの」「環境を基本と考え」「子どもが伸び伸びと生活できる場」などと表現され、両者ともに環境を重視している点で一致している。

ただし学生では、既述のように、環境要因の占有と保育者効力感との間に有意な負の相関が見られ、現職保育者では、両者に有意な相関は見られなかった（表2）。また、現職保育者では、環境要因の占有の平均値が極めて高かった（表1）。様々な要因を幅広く含め「環境」と捉え、保育の基盤や土台と位置付ける現職保育者に対して、学生の場合は、保育職への興味・関心が高く、保育者効力感が高い学生ほど、多くの要因を考え合わせた上で、環境要因の割合を回答している可能性がある。

IV まとめと今後の課題

本論では、保育者志望学生が保育内容「環境」の授業実施前に抱く環境概念の特徴と課題を現職保育者との比較から検討した。その結果、「環境に関わる保育者の役割の捉え」「環境の統制可能性の捉え」「環境の基本的な位置付け」において、保育者志望学生と現職保育者との間に相違が示唆された。

保育内容「環境」の授業による環境概念の変容を検討した西山ら（2017）では、最終回授業時の学生の記述に、「遊び」「主体的」といった基本的な幼児教育・保育の用語は殆ど挙がっていないものの、「促す」「育てる」に加えて、「生活」「興味」の共起関係は初回授業に比べ強くなっていた。これらのことから、子どもが主体となって環境に関わる姿への視点が出現しているとした。また、「育つ」の共起関係は初回に比べ強くなっており、「育てる」という保育者主体

の役割意識とともに、子どもが主体となって「育つ」姿を見守る役割意識が現れているとしている。こうした授業後における学生らの環境概念の特徴は、本論で明らかになった現職保育者の特徴と重なるものの、総じてその認識は十分とは言い難い。本論で明示された、「環境に関わる保育者の役割」「環境の統制可能性」「環境の基本的な位置付け」を意識した、授業改善のための具体的な方途を提案し、実践、評価することが次の課題と言える。

なお今回、環境要因の占有については、簡易な方法により測定したが、別の方法を工夫するなどして、改めて検証する必要がある。また今後、現職保育者については、十分なデータ数を収集し、保育経験年数（初任、中堅、熟練）によってどのような違いがあるのか、どのような要因が環境概念の形成に繋がっているのか明らかにし、養成教育に還元することが課題と考えられる。

注

1. 本論では、引用はそのまま「領域」と記す。「保育内容」と「領域」は同意とする。
2. KHCoder：内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェア。<http://khc.sourceforge.net/dl.html>
3. 質問項目は西山ら（2017）とほぼ同じである。
4. ChaSen(茶筌)：奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発された形態素解析ツール。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 樋口耕一（2012）．社会調査における計量テキスト分析の手順と実際—アンケートの自由回答を中心に— 石田基広・金明哲編 コーパスとテキストマイニング 共立出版
- 樋口耕一（2013）．KH Coder2.x リファレンス・マニュアル <http://khc.sourceforge.net/diagram.html>（2013年6月23日閲覧）
- 神長美津子（2017）．教職課程認定基準の改正の概要 無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会編 幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～ 萌文書林
- 片山美香・伊藤智里・馬場訓子（2020）．幼稚園教諭養成課程における領域「言葉」に関する専門的事項の授業内容の検討 岡山大学教師教育開発センター紀要, 10, 49-61.
- 小林哲郎. (1999) . S C T 氏原寛・小川捷之・近藤邦夫・鑪幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕編 カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房
- 松本裕治（2000）．形態素解析システム「茶筌」 情報処理, 41(11), 1208-1214.
- 三木知子・桜井茂男（1998）．保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46(2), 203-211.

- 文部科学省中央教育審議会（2015）．これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf（2020 年 12 月 15 日閲覧）
- 文部科学省（2017）．幼稚園教育要領〈平成 29 年告示〉 フレーベル館．
- 無藤 隆（2009）．幼児教育の原則―保育内容を徹底的に考える ミネルヴァ書房
- 西山 修（2006）．幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成 保育学研究，44(2)，150-160．
- 西山 修・岡村幸代・中川智之・片山美香（2017）．保育内容「環境」の授業実践における環境概念の変容を捉える試み 岡山大学大学院教育学研究科研究集録，166，31-40
- 佐野勝男・槇田 仁（1960）．精研式文章完成法テスト解説：成人用 金子書房

Characteristics of the Environmental Concept of the Students Who Aim to Work in the Childcare Field before Taking Classes about Childcare Contents “Environment”

NISHIYAMA Osamu*1

This study attempts to reveal the characteristics of the environmental concept students who aim to work in the childcare field before they take classes about childcare contents “environment”. In particular, I collected descriptive data using the “Sentence Completion Test” to capture students’ environmental concept before they take childcare contents “environment” classes in their childcare vocational school. The descriptive data was mainly put into a quantitative analysis and qualitative analysis using text mining. Students’ characteristics is also examined in a comparison with the environmental concepts of current childcare workers. The result suggests that there are differences between those students and current workers in terms of “understanding the role of childcare workers in the environment”, “understanding the controllability of the environment” and “basic positioning of environment”.

Keywords : childcare contents “environment”, environmental concept, students who aim to work in the childcare field, current childcare workers

*1 Graduate School of Education, Okayama University
